

清水砦博展

彩陶庵ロフトギャラリー-

1999年2月26日(金) ~ 3月7日(日)



2月25日(木)午後2時頃搬入開始



STAGE 99-D

D44 × W44 × H155cm



STAGE 99-F

D45 × W45 × H85cm



SPACE RECEPTOR

D54 × W135 × H135cm



STAGE 99-C /700,000-
D53.5 × W53.5 ×
H62.5?B / 1998年制作

STAGE 98-C
D32 × W32 × H36cm

STAGE 99-E-
D54 × W54 × H107cm



STAGE 99-B
D34 × W34 × H71cm



STAGE 99-A
D436.5 × W36.5 ×
H90cm



清水砮博展《ロフトギャラリー》 / (彩陶庵・白田 豊)

近年の清水砮博の発表は、類似形のピースを床にならべて楕円形などに構成する、そのユニット全体を1点として展開を続けてきたが、今回は各作品が独立して存在し、他の作品と共存しながら空間を構成している。おのおのの作品は陶の皮膜で隔たれた内部の空間性がギャラリーの空間全体へ拡散して互いの作品に反応し、あるときは静かな波のような調べで、またあるときは圧倒されるような大音響が響きわたるように作品同士が共鳴しながら空間全体に広がっていくようだ。

作品自体が大型化するにともない、辺や角の一部が大きく切り込まれて作品の内部がより一層強調され、内外部の空間性が差し込む光とともに親密に交錯する。清水砮博の空間を捉える意識が以前にも増して強くなってきていることを物語っている。

画廊空間に静かに佇む作品たちと接していると陶芸の奥行きを改めて痛感した。「『土味』をなるべく排除して純粋に造形にこだわりたい」意志の強い清水征博の造形は、シャープな直線が強烈に視覚映像として映り込む。一見金属板や石膏などを素材としているかのような感覚に陥るが、しかし実に艶かしい「陶」独特の匂いが漂ってくることに気付かされる。焼成によって土の面が柔らかく緩やかな湖面のように、自然な歪みが形成される。これが清水征博が土を使って造形する真意であり、シャープな直線に囲まれた柔らかい歪みをもった面は、優しくそして力強く土の存在感を発言している。柔らかさや堅さ、暖かさや冷たさ、優しさや力強さなど相反する印象が交錯しながら飛び込んでくる。「土は饒舌」という表現はまさに言い得て妙である。清水の「土味をなるべく排除して」というのは単に観念的な問題で、実は徹底的に土の質感にこだわったまさに陶ならでは造形表現である。

単にシャープな形状や構築的な形態のみを求めるならば、何も土を使わずに金属など他の素材で表現した方が造形にはこだわられる。しかし清水は、陶という素材、陶芸という芸術分野にこだわ

わり、陶芸のもつ独特の性質をも自分の造形として転化し、存在感を際だたせている。

素材の土、制作過程の特性を客観的に受け入れ、独自の造形に結びつけることによって生まれた清水征博の表現は、これまで「工芸(陶芸)」が抱えてきた曖昧さや、その本質そのものに至るまでの様々な問題を抽出し、工芸の本質そして、その本来あるべき現代の工芸のポジションを確かな意志を持って語りかけてくれる。

